

資 料

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(3)

——ヒルデスハイムの事例を中心に——

若曾根 健 治

- 1 はじめに
- 2 フェーデ通告状の端緒・意義・研究また儀礼の問題
- 3 フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉——概要(以上、139号)
- 4 フェーデ通告状とその分析(140号 [10~14]・本号 [15~24])

4 フェーデ通告状とその分析(承前)

15 通告状発行に到る諸事由をめぐって(1)——女性にたいするふるまい——さて、通告状に〈だれだれのことで〉とあるとき〈だれ〉の身分・地位が書状自体からはっきり判る場合がむろんある。次の、ヒルデスハイム市を〈敵〉とする通告状 [3] であり、しかもここからは新たな情報もえられる。

[3] „Wettet, burgermeister, raid tho H. u. ghemeynheyte geystlick u. wertlick, [i] dat ek Herman van Belinkhusen, Henrik van Zeghenhorst, (中略) u. Ludolff u. Johan, ghebrodere, willen juwe vyent zyn [ii] umme hern Henrikes Wormes willen, de juwe medewoner iz, u. umme der unghenade willen u. umme dat unrecht, de he hevet ghedan an unsir sustir u. unsir nifteln Alheyde van Belinckhusen myner sustir vorgescreven Herman van Belingkhuse. [iii] Wait wÿ semptliken hir vorgescreven stan dar ju ed. den juwen dar umme don geystlick ed. wertlick, dar wil wy unser ere nu bewart hebben. (後略)” ⁽¹²³⁾

既述の諸事例に等しくここにもただ〈ヘル・ハインリヒ・ヴォルムのことで〉とあるだけだが、これに直ぐ続いて〈彼は、貴殿（ヒルデスハイム市）の住民（juwe medewoner）である〉とみえる（[ii]）。これによって事情は一目瞭然である。ただハインリヒが〈市民〉身分にあったのか、市民身分にはなくたんに〈市内居住者〉にすぎぬのか、細かなところは判らぬ。有力者（hern）であるようだが、あえて〈市民（borgher）〉と記されていないのは、なにか意味があるのだろうか。ともあれ、〈ヘル・ハインリヒ…〉はヒルデスハイム市の保護下にあったこと、あるいは事情によっては、彼を都市が匿っていたこと、とかで都市自体に通告状が発せられた。

通告状 [3] では、〈ヘル・ハインリヒ…〉の行為が多少詳しく述べられている。これが、これまでの通告状と違う。では先ず、その行為とはなにか。〈無作法と不法（unghenade u. unrecht）〉である。したがって〈ヘル・ハインリヒ…のことで〉の意味するところは〈ヘル・ハインリヒ…の不当なる行為に抗議して〉となろう。次に、だれに加えた行為なのか。〈アルヘイダ・フォン・ペリンクフーゼン〉なる女性にたいして。彼女は通告者の筆頭にみえた〈ヘルマン〉の姉妹（sustir）にあたり、他の通告者の或る者からいえば〈姪（nifteln）〉とされていた。つまり、通告者の中には「親族」にあたる者がいた。一般的にみれば、通告者側にとって通例のことであったが。

アルヘイダに〈ヘル・ハインリヒ…〉が加えた〈無作法と不法〉なканずく〈無作法〉が具体的になんであったのかは、不詳。当該の言葉の意味はなかなか掴み難い。あたかも、近世初期時代によくみいだされる言葉〈思い上がった（mutwillig）行為⁽¹²⁴⁾〉に匹敵する語のようにみえる。とくに〈unghenade〉に〈無作法〉なる日本語をあててよいのかどうか、疑問がないわけではない。とにかく、〈無作法と不法〉を総体としてみて〈不品行なふるまい〉といったほどの意味ではないか。あるいは、〈口にしてはいけなひどいことをいう〉とか、の意味ではないか。というわけは、他ならぬ、女性に加えた行為ということであれば、あえてこうした漠とした言葉遣いをしたと取れなくもない。いずれにせよ、相手（被害者）が女性であるからには〈ことばの暴力⁽¹²⁵⁾〉を含む、品性を欠く

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(3)

(換言すれば、破廉恥な) ふるまいが充分考えられる。

ところで、通告状 [3] では、〈ヘルマン・フォン・ベリンクフーゼン〉を含め〈ハインリヒ・フォン・ツェーゲンホルスト〉以下全27名が通告者となっている。ここには、ヘルと呼ばれた者が2人含まれているものの、全体的にみて具体的な身分・地位・立場を示すてがかりはえられない。通告状には、〈ヘルマン〉の印章が、他の26人 ([ij]) (テキスト掲載にあたりごく一部を除き名前は省いた) の印章に代え捺された(フェーデ通告状に、複数の印章が押捺される例はあるのだろうか)。当面の問題——〈ヘル・ハインリヒ…のことで〉の〈ヘル・ハインリヒ…〉がいかなる立場の者であるか——は、上述のとおり明らかとなったので次に進みたいが、ただ、この場で、関連して以下の2点を取りあげたい。

(i) たった1人の市内居住者の行為のゆえに、ヒルデスハイム市参事会・市長の他に、同市に属する〈聖俗のすべての市民・住民 (ghemeynheyte geystlick u. wertlick) (通告状 [3] 冒頭) が、27名もの人人によるフェーデの通告に、そして延いてはその実行に晒される^(125a)。〈聖俗のすべて〉の者に(言い換えれば、俗人のみならず聖職にある者にも) 向けられるとの言い回しは、本稿紹介の通告状ではこれだけである。1人の〈住民〉の行為のゆえに、聖俗を問わずヒルデスハイム市民・住民全員にたいし責めを問う、というのである。責めを問うとは、こうである。いわく〈その(つまり、貴殿市の住民たる〈ヘル・ハインリヒ…〉の行為の) ゆえに、貴殿らにたいし、あるいは貴殿ゆかりの者らにたいし、冒頭に名を記したるわれらは、聖俗の行動をとる (don geystlick ed. wertlick) にあたり、われらの名誉を保持せんとした、と言うものなり〉 [iii] と。すなわち〈聖俗の行動をとる〉ということだ。

ここに〈聖俗の行動〉とりわけ〈聖〉の行動とは、なんであろうか。これは、〈聖俗のすべての市民・住民〉——俗人のみならず聖職にある者も——がフェーデ通告先となったことに関わって発せられた言葉であるのは、間違いない。ではそれは、たんに修辞上の表現であろうか。こうした一面をもつであろうが、他方で、都市には聖職者(司祭・修道士)が少なからず在住し⁽¹²⁶⁾、これらにも攻撃がおよぶ、と宣告されたものといえる。もちろん、聖職者の生命・身体自体にた

いする加害、ということではなく、その〈ゆかりの者ら〉にたいするそれが中心となる。市壁の内外には、修道院の土地があり農民がこれを保有する。ここに攻撃が加えられる、と通告を受けた、ということである。こうした攻撃について、或る限界的ケースをあげるとすれば、〈都市に火を放つ〉といった行動があろう。このような事情の下で、例えば、修道院の建物が焼かれるとか、壊されとかもあろう。ちなみに、ラント平和令では、修道院の建物等への攻撃は、禁じられている^(126a)。このように、攻撃がおよぶ対象の広がりや攻撃規模の大きさをおもいうとき〈ヘル・ハインリヒ…〉が〈アルヘイダ〉に加えたとされる行為（〈無作法と不法〉）は相当に重い性格のものであった、とみてとることができようか。

（ii）このように、1人の女性に加えられた行為にたいし、27名もの人人による、ヒルデスハイム市民・住民全員に向けてフェーデの実行が通告される。では、こう1人ひとりの名があげられるということは、なにを意味するのか。これはいうまでもなく、加害に関してはいっさい責めを負わぬ（つまり〈名誉を保持せん〉とする）ことを、名をみせた通告者1人ひとりの行為についてはっきりさせる（すなわち、被通告者に、またその他の者に知らしめる）ことを意図していた。通告者1人ひとりの名があげられるのは、通告者側にとって、誰が名誉保持に与る^{あずか}のかを明確にする意味を有していた。

他方、被通告者側にとっては、問題はどうか。この点を考えるに、攻撃が市民・住民全員に向けられるといっても、〈都市に火を放つ〉といった限界的ケースを除けば、現実には標的となるのは1人ひとりの市民・住民（その身体・財産）である。1人ひとりがフェーデ実行の〈威嚇〉に晒されることになり、そのための警戒を余儀なくされる。攻撃を自若として受け入れぬかぎりは。しかし、通告者27人個個についてそのアイデンティティ（彼は、だれなのか）に関し、あるいはその攻撃方法に関し必要な知識をえて攻撃に備えるといったことは、市民ら1人ひとりにとって至難のわざではないか。これが、被通告者側にとっての問題であった。市民ら個個には、適当なる対応がとれぬ、ということである。対応をとる（攻撃に備える）にせよ、コストがかかる。相手の攻撃を迎えるのに傭兵が用いられるときも、経費負担の問題は依然残るし、解雇後の傭兵のありようも

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(3)

問題となる。こうして、徒に^{いたずら}、市民・住民に警戒の念ばかりが募ってくる。警戒が積みつもれば、やがてそれは恐怖となってこよう。市参事会としても放置できない事態である。

あれこれ考えると、募る警戒の念をできるかぎり軽くしてやるのが、市民らのために果たすべき市参事会の任務となってこざるをえぬ。任務の最たるのが、通告者側と交渉・折衝することにある。交渉・折衝の途に踏み入ることが、参事会の視野に入ってこぬわけにはいかない。しかも、これは、通告者側にとっても望まれることではなかったか。この点について付言すれば——〈ヘル・ハインリヒ…〉が〈アルヘイダ〉に加えたとされる〈無作法と不法〉の行為のゆえに〈ヘルマン・フォン・ベリンクフーゼン〉らがフェーデ通告におよぶというとき、当該行為を事由に〈ヘルマン〉らはいきなり通告におよんだのではなかろう。先ず都市側（市民・住民）と折衝・交渉をおこない、賠償を求める、といった行動を起こしていたに違いない。ところがこの行動が、都市側の抵抗（なканずく「裁判拒絶」）に（しかも、いくたびか）遭い一向に進まぬ、という事態（つまり、紛糾した状況）が起きていた。こうした事態が、フェーデ通告に先行してあったとおもわれる。こうみえてくると、市参事会が通告者側との交渉・折衝の途に踏み入るのは、通告者側にとっても望まれることである。市参事会にとっては、或る意味、事はふりだしに戻ることに、しかもこれはとくに難しいわけではないはずである。

とにかく、こう考えてくると、通告状の意義とはなにか、をあらためて問わざるをえない。少なくとも、通告状の発給は、これによってもっぱら〈敵〉・〈友〉の関係を築く（しかも、継続的に築く）という役目を果たすだけのものとは、いえなくなろう。

16 通告状発行に到る諸事由をめぐって (2) ——市内居住者と外来者——通告状 [3] において〈ヘル・ハインリヒ・ヴォルム〉は〈住民〉とあって〈市民〉とは称ばれていなかった。言葉遣いだけからいえば、彼は外来者としてヒルデスハイム市に滞在していたとみることもできなくはない。ともあれ、こういった外来者・客人の問題もまた、通告状にみえる。次の [4] である。

[4] „Gy ratheren (中略) tho H.. Weted, [i] dat ik wille jûwe viand wesen [ii] dorch den willen, dat gy Everde van Ummenum mynem vrund nicht enwillen loos gheven, wenne gy en ghevanghen hebben, also he jûwer velich was, [iii] u. wil my des tho den eren an jû beward hebben. (中略) /Gherd Phiningh dedit.“⁽¹²⁷⁾

これによれば〈ゲルド・フィーニング〉がヒルデスハイムに通告状を発するのは、同市が〈わが友 (mynem vrund) エーフェルト・ウツメルンを釈放せぬ〉ことに由来する。〈というわけは、貴殿 (ヒルデスハイム市参事会) は彼 (エーフェルト) を捕らえたからである。彼は、貴殿ら (による攻撃) から身を護られて (jûwer velich) いるはずであるのに [ii]。〉ここに〈貴殿ら (による攻撃) から身を護られている〉とは、いかなる事態を指しているのか。〈エーフェルト〉がヒルデスハイム市から市内における「通行安全の権利 (sicheres Geleit)」を与えられていることではないか⁽¹²⁸⁾。通告者〈ゲルド〉は、当市の市民 (もしくは、市民権はもたぬが定住の住民) では、あるまい。一市民、一住民が自身の所属都市に向けてフェードを通告するのは、まず考えられない。とすれば、〈ゲルド〉の〈友〉である〈エーフェルト〉もヒルデスハイム市民ではない、とみななければならぬ。或る市民が自身の所属都市による攻撃から身を護られている、といった事態は考えられぬから。ましてや、そのことを文字にまで書き記すとは考えられない。〈友〉たる〈エーフェルト〉は〈ゲルド〉の〈仲間〉であろう。例えば〈商人仲間〉とかが考えられるが、いかなる意味の仲間関係にあるのか、詳細は判らない。とにかく、彼は、外来者・客人としてヒルデスハイム市を訪問中・滞在中であったからこそ、通告状の、次の趣旨が活きてくるのである。彼は、訪問先の都市当局 (都市裁判所・市参事会) や市民による、起こりうる攻撃から身を護られているはずである、と。

というわけは、訪問先の都市における外来者・客人 (なかんずく、外来商人) の地位が危険に晒される事態は、少なくなかったからである。その顕著な例の1つがいわゆる〈報復としての差押え (Repressalienarrest)〉に遭遇することにあった。債務者当人の債務に代わって、第三者 (債務者ゆかりの者を含む) の財にたいし債権者が差押えを敢行するという現象である。日本中世にも似たもの (「国

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(3)

質」・「郷質」など)があった^(128a)。ドイツの場合、とりわけ都市において起きた、この差押え現象は、中世「仮差押え」史研究において真っ先にとりあげられるテーマであった⁽¹²⁹⁾。

17 通告状発行に到る諸事由について(3)——民事的紛争——外来者または客人にたいする加害問題は商業上・通商上の事項に繋がる。そして商業上・通商上の問題は、現在の基準でいえば民事的な意味の加害事件となってくる。こういった事件をフェーデ通告の事由として語るのは、通告状[5]である。先の通告状[3]でみた、女性に加えられた〈無作法と不法〉は、今日からいえば刑事的事件であったといえようが、通告状[5]では、純然たる民事的事件が通告の事由としてあがっている。

[5] „Wetet, her kerhere van sunte Lamberde, [i] dat ik Bernd van Yensen de junghere Alberdes sone wil juwe vigent wesen [ii] dar umme, dat gi ju hebbet kopen laten up Ordenbarge Boke mimen om u. vorunrechtet dene, u. [iii] wil des mit ju u. minen knechten myn ere an ju wol verwaret hebben. (後略).“⁽¹³⁰⁾

本通告状は、これまで紹介してきたものと異なりヒルデスハイム市参事会・市長・市民らに、ではなく、同市の新市に所在する聖ランベルティ教会(Lambertikirche)の司祭(her kerhere)に宛てたもの。司祭の個人名はあがっていない⁽¹³¹⁾。通告状[3]では〈聖俗のすべての市民〉らが通告先となっていたが、ここでは具体的に或る教会の首長として一聖職者がフェーデの通告を受けている。なお、1220年ころ、聖ランベルティ教会を中心にヒルデスハイム新市が、旧市南東に張り出すかたちで建設され、独立の市庁舎が建てられた。最終的に、旧市・新市がヒルデスハイム一市へと統合されるに到ったのは、1803年のこと⁽¹³²⁾だが、ともかく、本通告状[5]がヒルデスハイム市とまったく無関係なものであるとはいえない。

フェーデの通告者は〈ベルント(ベルンハルト)・フォン・イエンゼン(Yensen)(若)〉なる者(〈アルベルトの息〉)。〈次の件で(dar umme)〉としてあがる通告の事由([ii])は、以下のとおりである。短文にもかかわらず、いな、それだからこそ却って、これを正確に理解するのはやっかいだ。原文は上記のとおり〈dat gi ju hebbet kopen laten up Ordenbarge Boke mimen om u. vorunrechtet

dene〉とある。意味を汲んで訳せば、こうだろうか。〈貴殿（司祭）は、わが伯父オルデンベルク・ボックの意に反し、彼の（所有する）物を買入れ、そうすることで、不正を犯したという（件で）。〉司祭の買入れ行為は、甥ベルントの目からみれば伯父の財産に損害を与える内容のものであった。換言すれば、事態はこうであろうか。〈貴殿（司祭）は、自己の利得のため、伯父オルデンベルクが売る意思がないのに（あるいは、伯父の知らぬ間に）、伯父の所有する物を買入れ、これによって不正をおこなった〉と。

もしこう理解できるとき、「伯父の所有する物」とはなにか。これは、おそらく土地とおもわれる。通告状 [5] 発行の背景になっているのは、司祭とオルデンベルクとの間で、後者が所有する財をめぐる或る確執が生じていたことにある。とすれば、この財とは土地とみられる。確執が起きていてフェーデ通告の事由となっているほどのもの（財）ならば、これを土地とみるのは、あながち無理とはいえない。そこで、事態はこう考えられないか。司祭はオルデンベルクに所有地を聖ランベルティ教会に売る（もしくは、寄進する）よう催促していたが、オルデンベルクが渋って（つまり迷って）いた。最終的に、司祭は強引に買入れ交渉に入り、代金をオルデンベルクに渡し、オルデンベルクもやむなくこれを了とした。ところが、これは甥の目からみれば、司祭は伯父に〈不正〉を働いた、ということになる。通告状発行の背景にあった事態は、修道院による、土地の集積に向けた運動に起因するとみられる。

ただしここで急いで付言すれば、以上推測したところはあくまでも甥〈ベルント〉の目からみたときのなしである。伯父オルデンベルク自身は、別だったかも知れない。すなわち、所有物の売買によって甚だしく損害を蒙ったとはみていなかった、ということ。たしかに、司祭側の強引さに不満はあったが、伯父は最終的に売買に踏みきった。もしそうとすれば、甥がおもうほど（しかも、フェーデを通告するほど）には事態を深刻に捉えていなかったであろう、ということである。推測するに、ここにもしかすると、相続問題が絡んでいたのかも知れない。オルデンベルクの兄弟アルベルトの息子〈ベルント〉は、^{かね}予てより、伯父の没後その財産を受け継ぐのは、他ならぬ自分だとおもっていたところ、伯父の方は財

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(3)

産(なかんずく土地)を聖ランベルティ教会に寄進する意向をもあわせもっていた。ただ、最終の決断をせぬままでいた。ところが、教会側はこうした事情を逸早く知り、甥の関知せぬ間にオルデンベルクと交渉を重ね、寄進を受けることに成功した——こういった構図である。ありえぬことではないが、いずれにせよ詳細は不明。

ところで、もう1つ通告状 [5] で厄介な問題がある。〈[iii] (ik Bernd van Yensen) wil des mit ju u. minen knechten myn ere an ju wol verwaret hebben〉の文章である。これはこれまで他の通告状でいくどもみてきた、通告者の〈名誉保持〉をうたうもの。このこと自体に疑問はない。問題は „mit ju u. minen knechten“ にある。ただしこの中の „mit…minen knechten“ には、疑いはない。この〈余の従僕らとともに〉にいう〈余の従僕ら〉とは、主人〈ベルント〉とともにフェーデの実行に従事する者らであり、主人のいわば戦力を指すスタッフに他ならぬ。当然彼らも、主人同様〈名誉を保持〉する。

他方 „mit ju“ とは、なにか。これが問題である。なぜ、この言葉が挿し込まれているのか。通例ならば 〈(ik Bernd van Yensen) wil des mit minen knechten myn ere an ju wol verwaret hebben〉で事足りるはず。なのに „mit ju“ が加わる。となると、字義とおりには〈貴殿とともに、かつ、余の従僕らとともに、余は、貴殿にたいし、余の名誉を保持した、と言うものなり〉となる。だが、これでは意味が通らぬ。〈貴殿〉とはこれまでみてきたとおり被告者(司祭側)を指す。にもかかわらず〈貴殿とともに…余は…余の名誉を保持する〉とは、どうしたことか。〈余と、余の従僕らとは、貴殿を相手に(戦うことがあっても)、(われらの) 名誉を保持する〉といった趣旨に都合よく解することは、できないであろう。残念ながら、この問題は、残さざるをえない。

ともあれ、当面のところは、民事的紛争もフェーデ通告の理由となりえたことが確認できればよい。この点に関し、じつをいえば、肝心なことは「もめごと」があったか、否かである。もめごとが現在の基準でいって民事のものであるか、刑事のものであるのかは当時、法学者でもないかぎりなんびとも気にしなかったであろう。

18 通告状発行に到る諸事由について (4) —— 〈不法〉の問題——さて、ザクセン＝リューネブルク大公アルブレヒトが〈オルデンベルク・ボック〉なる者に宛てた、次の通告状 [6] をみていただきたい。通告状としてはめずらしく発行場所（ツェレ市）の名があがる。ツェレ（Celle）市には大公家の居城があり、これを中心に、ヒルデスハイム司教区北部一帯に「ヴェルフエン家の大領土」が展開していた⁽¹³³⁾。なお、本稿所掲の他の通告状では、なぜ発行場所が書き記されぬのかは、どうも判らぬところである。

[6] „Albertus dei gratia dux/Saxonie et Luneborch. /Wete Ordenbergh Bôck wonhaftich to Poppenborch, [i] dat we dyn vygend wesen willen [ii] umme des rades willen van H. u. ok umme des ungeliken willen, dat du uns gedan hest, dar du uns nicht to antwerden woldest, [iii] u. willet des unse ere an dy wol bewaret hebben. Gheven to Tzelle (中略) under unsem secrete.”⁽¹³⁴⁾

これは、通告状 [5] と同様ヒルデスハイム市に宛てたものではない。ただ、通告状発行に到る事由の1つに〈不法〉の問題があげられ、ここに当市の名が出ている。通告の事由の1つとは（a）〈ヒルデスハイム市参事会のことで [ii]〉とあるもの。これは、通告状 [1] に〈ヒルマール…のことで〉とあったのと同様の記述法であり、市参事会が通告者側（大公）に立つのか、それとも被告者側（ポッペンブルク在住のオルデンベルク・ボック）に繋がっているのかは、判らない。ところが、その点を見るのに、好都合なことに、関係するとおもわれる或る文書がある。それは、3ヶ月ほど前の1383年2月23日アルブレヒト大公がヒルデスハイム市に与え、同市を保護下におくことを告げたものである。ここに、こうみえる。〈彼ら（ヒルデスハイム市）がフェーデに陥った相手とは、余（大公）は、時を移さず、敵として立つべし。同市から、それを求められるときは⁽¹³⁵⁾。〉俗にいう〈汝の敵は、余の敵でもある〉ことを告げるもの。こうして大公が通告状 [6] を発したのは〈ヒルデスハイム市参事会のためを計って〉のことであった。これが、上記（a）〈ヒルデスハイム市参事会のことで〉の意味するところとなる。言い換えれば、〈2月23日の証書がうたうところを汲み同参事会の利益となるように〉との趣旨である。市参事会は、大公側ゆかりの者（〈友〉）

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(3)

となっていた。

通告理由のもう1つに、(b)〈貴殿(ポッペンブルク在住のオルデンベルク・ボック)が余(大公)に加えた不法(ungeliken)のゆえに〉とみえる。しかも、〈貴殿はそれについて余にたいし責めを果たそうとせぬ〉([ii])のである。〈責めを果たさぬ(nicht antworten)〉とあるのは、ここでは、通告状における、被通告者側に向けられた批難をあらわす常套語である。具体的には、被通告者(ポッペンブルク在住のオルデンベルク・ボック)が賠償に応じぬ、出廷を拒否する、判決に従わぬなど、状況に応じていろいろの意味をもつ言葉となる。また、後述するように⁽¹³⁶⁾ 通告者側が発する、〈名誉保持〉に関わる言葉としても用いられる。

ここで、質問が出てくる。このように通告の事由としてあげられていた、(a)〈ヒルデスハイム市参事会のこと〉と、(b)〈ポッペンブルク在住のオルデンベルク・ボック〉が大公に加えた〈不法〉の件との間には、なんらか関係があるかということである。上述の2月23日付け証書を仲立ちにしてみると、少なくとも1つの関係は認めることができよう。そこで、この前提の下で考えるに、従来ヒルデスハイム市は、オルデンベルクとフェーデ(敵対関係)の状況にあった。この事情下で2月23日付け証書の発行をきっかけに、同市からアルブレヒト大公側に支援・助力の申し入れがあり(これが〈ヒルデスハイム市参事会のことで〉を指している)、これに応じ大公側がフェーデを引き受け(市民は生業に日多忙であり、傭兵を雇うのもこの理由によっていた!）、または、大公側もフェーデを引き受け、この結果大公もオルデンベルク側からの〈攻撃〉に向き合うことになる。攻撃は、大公側からみれば〈不法〉な行為を意味した。攻撃がなぜ〈不法〉なのかは(〈攻撃〉の内容と同様)不明である。想像してみるに、通告のないフェーデの実行であったからか。オルデンベルク側は、アルブレヒト大公とヒルデスハイム市との間の保護協定を逸早く知って、先制攻撃をしかけ、これが無通告のフェーデ実行となったのかも知れない。実行の事後で、通告すればよいと考えて。とにかく〈不法〉にたいし大公側はオルデンベルクに向けフェーデ通告をおこなった(通告状[6])。むろんおそらく、通告に到る前の段階で〈不法〉

の件で賠償のための折衝・交渉があったことが推測される。交渉不成立のため、大公側によるフェーデ通告が生じた——こうみることができないか。

ただし、これはあくまで2月23日付け証書（保護協定書）を仲立ちにして考えたところのもの。大公の見地からみてオルデンベルクが加えたとされる〈不法〉（厳密に言えば、〈不法〉だと称^よばれた行為）の事情がじっさいに以上のとおりであったのかは、不詳である。以上にみたのとは別個の事情による、大公称するところの〈不法〉が存在したのかも知れない。

ともあれ、〈相手側に不法のおこないがあった〉と主張するのは、フェーデ通告の事由として世間にとおりのよい、この意味で格好の事由として周囲に公然容認される確率の高いものであった。また〈不法〉があったか、なかったかをめぐって、〈立証〉がほとんど不問に付されている社会的現実があるとき、〈不法〉が通告の〈口実〉に用いられ易かったのは、たやすく想像できる。現に、既述のとおり〈ウルリヒ・クノーケ〉が通告状〔2〕を発したのも〈ブラント・フォン・プライスム〉が彼に加えたとされる〈不法（unrechten）の件〉（これも厳密に言えば、〈不法〉の行為^{とく}だとして称えられているもの）によっていたし、〈ヒルマー〉とヒルデスハイム市参事会間においても、たがいに〈不法〉の応酬合戦がみられた（通告状〔2〕）。

ここで翻って考えるに、〈不法〉ということがこのように日常的に論戦に上っていたということは、逆に言えば、〈法〉への意識が曲がりなりにも働いていたことを、われわれに理解させる。ただし、この場合、〈法〉といっても、正確に言えば、当事者レベルにおける、いわゆる〈法〉であり、自らいう〈法〉（あるいは、〈特権〉）であった。というわけは、現在の基準でみる客観的かつ一般的に妥当する法は（「聖書の法」とか「自然法」また「皇帝法（ローマ法）」とかを除けば）、当時存在していなかったから。

19 フェーデの実行と加害のありようについて（1）——通告者と支援者——さて、本節最後のテーマ、すなわちフェーデの実行と加害の問題である。これを、通告状にあらわれたかぎり^{かぎり}で考えてみたい。そこで最初に、次の通行状〔7〕をみていただきたい。

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(3)

[7] „Wetet, borgermeister (中略) to H., [i] dat ik Johan Berk wil juw fyenth syn mit mynen hulperen, de ik to der feyde krygen kan. [ii] Weret aff ik upp juw suchte u. jenggen schaden dede an rove, an brande, an doetslage, woe man den schaden benomen kunde ader den komenden schaden, wil ik mit mynen hulperen juwe vyent syn [iii] u. wilt unse ere to guden tiiden darane vorwaret hebben u. wilt juw darto nicht antwerden. Gescreven (後略).”⁽¹³⁷⁾

ここでは、〈余ヨハン・ベルクと、余の支援者 (mit mynen hulperen) と〉がヒルデスハイム市にフェーデを通告している ([i])。先ず (イ) 本通告状で注目する3点を指摘したい。

(a) 第1に、通告状 [3] の通告者欄との関連である。通告状 [3] において通告者は、既述のとおり〈ヘルマン・フォン・ベリンクフーゼン〉他26名があがっていた。じつは、〈ヘルマン〉と、この26名の者らがいかなる関係にあったのかは、本通告状 [7] をとおして知ることができる。すなわち、通告状 [3] における通告者〈ヘルマン・フォン・ベリンクフーゼン〉の他26名(筆頭にあった〈ハインリヒ・フォン・ツェーゲンホルスト〉を始めとする)の者らはすべて〈ヘルマン〉の〈支援者 (hulperen)〉であったことが判る。本通告状 [7] にみえるような。〈ヘルマン〉がいわば〈主たる通告者〉であったことは、疑いなかろう。通告の理由となったのは〈ヘルマン〉の姉妹に加えられた〈無作法と不法〉の事件であったし、彼の印章が26名の印章を代表し、通告状 ([3]) に捺されていた。

通告状 [7] においては、通告状 [3] の場合とは異なり〈支援者〉は個々に名をあげられていない。通告状発行の時点で支援者個々の名を記すことができぬのは、〈当該フェーデ (通告以後に、あるいはフェーデ実行) の過程において (to der feyde)、余 (通告者ヨハン) が取得し (krygen) うる〉者らが問題となっているからである ([i])。通告者は、フェーデの過程で〈支援者〉をえることができる、と見込んでいる。ここに単にレトリックの問題だけをみることはできない。フェーデ通告後において、あるいは実行の過程において支援者がえられるとの見込みを示すことは、被通告者への圧力になるし、被通告者にとっては脅威となる。圧力を行使することで、また脅威を醸^{かも}しだすことで、被通告者を交渉や折

衝に引き込む意図が通告者側にあることは、考えられうる事態である。

(b) 第2に通告状 [7] には、フェーデの実行と、これにともなう加害の状況が述べられている。〈(当面) 名をあげうる害によってであれ、今後起きうる害によってであれ、余が略奪によれ (an rove)、火付けによれ (an brande) また殺害によれ (an doetslage)、貴殿を追跡攻撃し (suchte)、貴殿になにかの害を加えたる (schaden dede) とき、(これによって) 余と、余の支援者とは、貴殿の敵となるなり [ii]。〉これに従えば、〈フェーデを実行する〉とは〈追跡攻撃する (suchen, soken)〉ということにある。〈探索する・追跡する・攻撃する (suchen, soken)〉の語 (これは、中高語の „heimsuchen“ に相応している) は、フェーデ通告状 (そして〈名誉保持告知状〉) にほとんど間断なくみいだされ、フェーデ実行に関係する一常套語であった。攻撃の具体的形態は〈略奪、火付け、殺害 (もしくは故殺)〉であるが、しかしこれらにかぎられぬことが強調されている。およそ加害にあたるものならば、いかなる行為をもなしうる。攻撃手段や方法の無制限性、ということ。〈貴殿 (通告者) がわれら (被通告者) にたいし実行した探索・追跡・攻撃の手段の (悪質なるが) ゆえに、汝のなしたる〇〇〇の行為は、不法なり〉といった趣旨のことを、フェーデ通告の相手 (被通告者) 側にいわせぬのが、肝要なことであった。このための措置を、予め講じておこうとする考えが、当該の文言 (〈(当面) 名をあげうる害によってであれ、今後起きうる害によってであれ〉) に、込められているといえる。

(c) 第3に、加害行為の結果はどうか——すなわち、なにかずく法的効果の点である。〈それ (加害行為) について、われら (余と、余の支援者) は、われらの名誉をつねに保持したるもの、というならん〉——そして、こう続ける——〈その (加害行為の) ことで、われらは、貴殿にたいし責めを負うことはなからん (nicht antworten)。〉被通告者側に向けられた批難の言葉にあったもの (通告状 [6]) と同様、通告者 (フェーデ実行予定者) 側においても〈責めを負わぬ〉旨が発信される。加害の件についてフェーデの被害者側に賠償することはせぬ、被害者側による告訴には応じぬ、応じぬとも責めは負わぬ、と⁽¹³⁸⁾。

次に (ロ)、フェーデ実行すなわち攻撃の矛先はなにか、の問題である。本通

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(3)

告状には、フェーデの実行とこれによる加害について基本的なありようがほぼ語り尽くされている。〈支援者〉までが実行に加われば加害とこれに伴う被害との状況はいっそう増幅してあらわれよう。増幅するのは、通告先に〈脅威〉を募らせるのに効果的であるのは間違いない。ただ、通告状は、市長とか市民・市参事会とか通告先の名はあげるが、具体的にこれらの通告先のなににフェーデが実行されるのか(すなわち、攻撃の矛先が向けられる対象物はなにか)に関しては、通例述べていない(この点、下述通告状 [11] はやや例外となる)。攻撃矛先の点について、研究史を大雑把にみると、文化史家フライタークによれば、被通告者(つまり〈敵〉)に属するすべてのもの、すなわちその身体と財産のすべてとなる。これらをどうあつかおうとも通告者(延いては、フェーデ実行者)側の思いのままであった(例えば、敵の身柄を捕捉したとき彼を釈放することもあるし、殺すこともできる)。ただし、女性と子供にたいしては別格であり、女性の衣料や装身具には手を付けぬのはフェーデの慣行であった⁽¹³⁹⁾。なお〈敵〉が有するすべてのものとなると、その「人格」(名誉や声望・威信また風評など)も攻撃の対象となるであろう(中傷のため「うわさ」を流す・非難のビラを配るとか)。

攻撃先として研究史上よく指摘されるのは、相手の「経済的基盤」(ハンス・パッツェ)ということである⁽¹⁴⁰⁾。これが、攻撃先の少なくとも主たるところとされる。被害者側からみれば「経済損害」ということだ。これについていっそう細かくみたのが、アルガジである。彼が強調するのは、領主(ヘル)間フェーデにおいて「農民・村民」が攻撃的になる、ということである。かくして、耕地は荒らされ、家畜・農具が奪われ、農民が拉致される。延いては、廃村ということも起きうるのである。これにたいし通告先(被通告者)たる「領主自身」(これには、領主の家族も含まれる)そのものは、攻撃的ではなかった⁽¹⁴¹⁾。ここで「領主自身」というのは、領主の身柄・身体である。では領主の財(家産)については、どうか。このうち、領主の居城・城館は「領主自身」に含まれる。居城・城館周囲の防備施設や、居城を守備する者ら(ミニステリアーレン・騎士・従士・従者・傭兵ら)や、居城における客人・酒宴仲間たちの身柄、あるいは財などは、どうか。この点について、彼の所論は必ずしも明瞭ではない。おそらく、

攻撃・襲撃的になったものとおもわれる⁽¹⁴²⁾。それらは、フェーデ実行における現実的な戦力を形成したから、これをたたく必要があった。

では、本稿がとりあげるように通告先が都市となっている事例では、どうなるうか。アルガジは「農民・村民」にならべて、ときとして「農民と商人」とか「農民と市民」のように、農民とともに商人・市民をあげるが⁽¹⁴³⁾、たんなる付けたりの感を免れない。商人や市民のなにが攻撃的になるのか、立ち入って考察していない。とにかく、この問題は、別途考察を要しよう。ただ、市壁の外・内には耕地が広がり作男がいたし、商業都市に不可欠の人人としてビール樽などを運ぶ「荷役人夫⁽¹⁴⁴⁾」もいた。こうした者らを襲うことがあったであろう。また都市の市門と、これを通る街道とを往来する商人の身柄・財を奪うこともあろう。他方、なによりも都市当局と市民にとって痛手となるのは、いうまでもなく、都市特有の事情を捉えた攻撃である。なにかんずく、市外から市内に向け火矢をしかけ、住宅密集地に大規模火災を発生させることである⁽¹⁴⁵⁾。

20 フェーデの実行と加害のありようについて (2) ——裁判の問題——フェーデ実行と加害をめぐる問題は、半世紀ほど後の15世紀中葉、以下の通告状 [8] [9] にも示されている。これらには、裁判の問題がみえている。そこで先ず、通告状 [8] である。

[8] „Wetet, borgermester (中略) to H., [i] dat ek Erasmus van Benxsen wil juwe fyent syn [ii] umme schulde willen, de ek juw hebbe to seggende, icht ek up ju sochte myd mynen hulpes hulperen, knechten u. mederideren. Icht wy juw yenygen schaden deden an rove, an brande, an dotzlage, wu me den schaden benomen mochte, [iii] dar wil ek juw nycht to antwoorden u. wil des myne ere to rechten tiden an ju vorwaret hebben, (後略).“⁽¹⁴⁶⁾

本通告状には、フェーデ実行の問題（下述）の他に、或る通告事由について述べられている。ここには、これまでのものにはなかったことがみえる。裁判もしくは訴訟についてである。〈余エラスムス・フォン・ベニングゼンは、貴殿（ヒルデスハイム市）と敵たらんと欲する [i]。それは、余が貴殿にたいし申し述べざる（つまり起こさざる）をえぬ告訴の件で（umme schulde willen, de ek juw

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(3)

hebbe to seggende) である [ii] 〉と。なお〈schulde (schult)〉には、他に「金銭債務」・「科」・「責め」といった意味がある。それを「告訴 (Beschuldigung)」と狭く捉えてしまうのは、問題があるかも知れないが、ここではそう把握するのが文脈に添っているとみられる⁽¹⁴⁷⁾。たとえ〈schulde (schult)〉を「金銭債務」とみるときでも、債権者が債務支払いを求め、債務者がこれを拒むとき、通例の場合訴訟にうったえるのは、決着のつけかたの1つとなる。この点でいえば、とくに問題となるほどの違いはない。ただ〈umme schulde willen〉を「告訴の件で」と捉えるとき、いかなる理由に基づく告訴なのかは、不詳。いずれにせよ、債務者による「裁判拒絶」が生じて、このことで裁判主宰者である都市が責めを問われ、これに満足に答えられなかった。これが、〈エラスムス〉によるフェーデ通告の誘因となったものとみられる。なお、「告訴」の問題は下述の通告状 [9] および [10] にもあらわれる。

当通告状 [8] では、文言上は〈余エラスムス〉のみが通告者としてあらわれ、その支援者 (〈mynen hulpes hulperen, knechten u. mederideren〉) は通告者となっていない。彼らは通告者当人とともに、ヒルデスハイム市にたいする、もっぱらフェーデ実行行為 (〈up ju sochte〉) の担い手としてあらわれている。ただし、文言のとおりこう狭く捉える必要はないが、とにかく、実行行為の形態は通告状 [7] にみたように、略奪、火付け、殺害であったが、これらに止まらぬ。〈余にとって、加害の行為となるものとして、名をあげうるかぎり [ii] 〉。フェーデ実行によっていかなる被害が出ようとも〈それによって余は貴殿にたいし責めを負うことには到らず、これによって貴殿にたいし正当な^{かん}間名誉を保持せんとするものなり [iii] 〉。加害行為の無限定・無制限性が、ここにもみえる。

21 フェーデの実行と加害のありようについて (3) ——「殺害」事件——次の通告状 [9] は、フェーデ実行・加害の問題、また「告訴」の問題について、通告状 [8] と類似するところが少なくない。反面、これまでの通告状には知られなかった、注目すべき言葉が知られる。

[9] „Witlik sy juk, rad u. stat to H., [i] dat ek Hermen Picht geve schuld Tyleken Wolters dem olden u. sinem sone Hanse umme sodane sake, also dat Cord Picht,

myn liflike sone, to dem dode komen is by on. [ii] Hirumme schulle gy, rad u. stad to H. weten, dat ek Hermen Picht u. al degenne, de umme mynen willen don u. laten willen, werden vigent der stad to H., u. wes wi don an bernde, rove, morde, dotslaghe, [iii] dar wille we unse ere anne vorwaret hebben so langhe, wente met lik vor unghelik [icht] sche etc. (後略)⁽¹⁴⁸⁾

ここでは通告の事由は、こうである。〈余ヘルマン・ピーヒトは、ティーレケ・ヴォルター、ハンス・ヴォルター父子を訴える (geve schuld) ものなり。わが息子コルト・ピーヒトが、彼ら (父子) の下で生命を失いたる (to dem dode komen is by on) 件で [i]。〉こうして通告状 [9] では、告訴の理由は明瞭である。親族「致死」の事件をめぐる裁判である。〈この件のゆえに (Hirumme)、貴殿ヒルデスハイム市参事会と市民は、知るべし。余ヘルマン・ピーヒト、および、余のために行為に加わり、あるいはこれを止めるなど (余と) 行為を共にする者は、ヒルデスハイム市の敵たらしとする [ii]。〉ここに〈余のために…行為を共にする者〉とはいうまでもなく〈ヘルマン〉の支援者である。

では、この〈敵〉たらしとすることが、ヴォルター父子にたいする告訴提起の〈件〉とどう繋がっているのか。そこで推測するに——〈コルト〉の致死事件には、ヴォルター父子が関わっていた、と亡き息子 (〈コルト〉) の父〈ヘルマン〉はみた。ただし、〈ヴォルター父子が〈コルト〉にたいし直接手を加えた (危害をおよぼした)〉といった、厳密に「故殺」をあらわす類の言葉はない。しかし、おそらく「故殺」事件 (つまり過失死・事故死の類ではない) とみてよい (傷害を被り死亡に到る場合を含む)。(訴訟) が問題となっていたから。もう一点——当該の事件が「血讐 (Blutrache)」(これは、殺人行為の連鎖を指し、加害・被害の親族間で、入れ代わり立ち代わり自力救済つまり報復のための殺人が継続し起こる) 事件なのか、または一過性の殺害事件 (ここでは、ほとんど当初から賠償金の支払いが中心となる) なのかは、判らない。おそらく後者であろうか。理由はここでも〈告訴〉が話題となっていたからという他はない。〈告訴〉が提起されたということは、「殺害の和解 (Totschlagsühne)」が懸案事項となっていたとみられる。「和解」は通例「仲裁」によって成り、本来的に、贖罪金の支払いが

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(3)

中心となる。なお、「血讐」事件にあっても、最終的には、贖罪金・賠償金の支払いによって片が付けられる。この点では「故殺」の場合と同じ。ただ「血讐」では他に、巡礼行や、殺害事件の現場における「贖罪碑 (Sühnstein)」の建立、被殺者のためのミサの実行などが殺人者に課せられるのが、慣例である⁽¹⁴⁹⁾。

さて、父〈ヘルマン〉がヴォルター父子の件に関して、ヒルデスハイム市・市民・市参事会にフェーデを通告するからには、同父子は同市ゆかりの者（市民であろう）とみて、間違いはなかろう。では、どうしてフェーデの通告先が都市・市民・市参事会となっているのか。おそらく、次のような事情が介在した結果ではないか。〈ヘルマン〉は当初ヴァルター父子を「故殺」の件で告訴するが、しかし父と子は出廷を拒むか、判決に従わぬか、あるいは逃亡するか等々に、およんだ。「裁判拒絶」である。こういったヴァルター父子のふるまいには、少なくとも一部分、都市の司法当局の責めに帰せられるところがあった。都市が、父子を出廷させるとか、父子による判決の履行を保証するとか、父子の逃亡を防ぐとかの点で、都市に手落ちがみられた、ということである。ために〈ヘルマン〉は、ヴァルター父子の代わりに、都市に賠償金の支払いを求めるか、あるいはこれを求めて訴訟を起こすかしたが、結局埒^{らち}が明かなかった。そこで、都市に向けフェーデ通告におよんだ、と。こうしたの推測に一理あるとすると、父〈ヘルマン〉が賠償金の取得に見込みが出てくるときは、通告は通告のみに止まり、フェーデ実行には到らぬことになろう。

フェーデ実行のありようについては、通告状 [8] にあったものとはほぼ変わらない。ただ実行の態様に火付け、略奪、故殺の他に、〈謀殺 (morde)〉による加害行為があげられているところが違っている。ただしこれは、さほど大きな点ではない。それよりも一段と注目すべき文言がみえる。〈それ（加害行為）についてわれらは、われらの名誉を保持した、と言うならん〉——に続け、こう語るところである——〈[いかなることであれ、] 不法に代わり法に基づき事態が進行するに到るまでの、この間^{かん}は (so langhe, wente met lik vor unghelik [icht] sche) [iii]。〉これは、なにを語るのでしょうか。例えば〈貴殿によって、その者（彼）に、不法の代わりに法が届けられるときは (ef om lik umme unlik van juk wedervaren

kunne)…⁽¹⁵⁰⁾》といった文章にみるように、〈正当なこと・法 (lik, ghelyke)〉は〈不正なこと・不法 (unlik, unghelik)〉に優先されなければならぬ、ということである。〈法〉が〈不法〉に先んじおこなわれるようになるまでの間は、ヒルデスハイム市はフェーデの実行、もしくはこの脅威に晒され続けるであろう、というのである。これは言い換えれば、次のことを表明している。フェーデを通告とおりじっさいに実行するか否かは、今後都市が〈ヘルマン・ピヒト〉の〈告訴〉にどう対応するのか、この対応の仕方いかんにかかっている、と。〈ヘルマン〉にとって〈法〉とは、同市がヴァルター父子に〈ヘルマン〉の〈告訴〉に応じさせるか、もしくは、同市自身が贖罪金・賠償金の支払いに応えるか、である。これらのための方法が、フェーデの通告であり、延いてはその実行を意味するのである。

こうみえてみると、フェーデの通告は、フェーデの実行と引き換えに、通告の相手先からなにかを俟つ[※]といった、通告者側の〈期待〉の意思を表明するためにも用いられるものといえよう。

22 フェーデの実行と加害のありようについて (4) ——〈ウァフェーデ〉——
 通告者のこうした〈期待〉は、次の通告状 [10] にも窺いうるであろう。しかも、これは、われわれの通告状に初めて出現する〈ウァフェーデ〉の問題と無関係ではないとおもわれる。

[10] „Wettet, borgermester u. rad u. ganse menheid der stad to H., [i] dat ick Godeke Cunradus juwe vigent wille wesen. [ii] Dar schulle gii alle nicht vorwesen umme sake willen, de ick to juck hebbe, ifft ek uppe juck sochte mit mynen hulperen, hulpers hulperen u. jennigen schaden dede, wu de schade were, worde effte toqueme effte wumen den benomen mach, dat sii dach ed. nacht nichtes uthbenompt, sunder uthbenompt Hanse Lusken den borgermestern, den ik vororveidet hebben, [iii] u. thei my dusser feide in Hermens vamme Husz sone frede u. unfrede. [iv] Gescreven under Hermens vamme Husz ingesegel, myns leven junchern, anno (後略).”⁽¹⁵¹⁾

本状には3名の人が登場する。1人は通告者たる〈ゴーデケ・コンラードゥス〉([i])。もう2人は〈ハンス (ヨハン)・ルーツェケ (Lusken)〉([ii])と〈ヘル

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(3)

マン・フォン・フース〉([iii])。先ず〈ゴードケ〉である。彼がフェーデ通告にあたってその事由とするのは、こうである。〈余(ゴードケ)が貴殿に提起する訴訟の件で(umme sake willen)、貴殿のだれも(きちん)と応対してくれぬので([ii])〉と。ここでは〈sake〉を〈訴訟〉として狭義の意味で捉えたが、たんに〈案件〉といったように広義に把握することもできる。いずれにせよ、〈ゴードケ〉が市参事会・市長らになんらかの理由でうったえ、あるいは苦情を申し立てていた。にもかかわらず、市参事会・市長らがこれを取りあげなかったか、あるいは、とりあげたが彼の満足するところには到らなかった。これが、通告者側の言い分であったとおもわれる。とにかく、フェーデ通告に踏み切る前に、〈ゴードケ〉はヒルデスハイム市側と訴訟の関係にあったこと、少なくとも交渉・折衝の間柄にあったことが判る。

だが結果的に、彼は通告へと決断せざるをえなかった。彼と彼の支援者とは、市参事会・市長・全市民を、昼夜をわかつた攻撃し(sochte)、加害におよぶ(schaden dede)であろう、と宣言する。〈加害の名に値する行為であれば、これがいかなる種類のものであれ、またいかに^よに称ばれている行為であれ手心を加えず行使し、しかもなんびとたりともこれから免れえぬ(nichtes uthbenompt)〉と。通告状における定式の文言である。ただ、ひとりの人物だけは別である、という。それが上述2番目の人〈ハンス〉であった。〈ただし、ハンス・ルーツェケは除いて(sunder uthbenompt Hanse Lusken)〉[ii]と。彼はこのとき市長(正確に言えば市長職の1人)であった。〈ゴードケ〉は、彼にはすでに〈ウァフェーデの誓約をおこなって(vororveidet)いた。〉つまり彼とは和解していた。都市当局のうち〈ハンス〉だけと和解をした経緯は、なんであろうか。不明だが、こう考えられる。ウァフェーデの誓約は、捕らえられ釈放されるときに捕捉を被ったこと(言い換えれば、捕捉に従事した者ら)にたいし報復はせぬ、と誓うことにある。であれば〈ハンス〉は市長の身にはあったが、〈ゴードケ〉の捕捉そのものには関係しておらず、ために〈ゴードケ〉は〈ハンス〉と和解し^{やす}易かったものと考えられる。ということは、他の(司法)当局者とも和解ができていたならば、フェーデ通告に到ることはなかったかも知れない。彼ら(他の当局者)との

和解に〈期待〉がもてなかったことが〈ゴードケ〉を通告に踏み切らせた、とみることができる。さらに一言いえば、〈ハンス〉は、〈ゴードケ〉が他の当局者と今後和解をするのに、仲立ちをなしうる地位にあることになる。

本通告状 [10] で文章上多少やっかいなのは、〈u. (sii) thei my dusser feide in Hermens vamme Husz sone frede u. unfrede〉の文である。ここに最後の第3の人物すなわち上記の〈ヘルマン〉が姿をみせる。彼は、印章押捺のくだり ([iv]) にみるように〈騎士見習い (junchern)〉であり、しかも〈ゴードケ〉の〈盟友〉(〈leven〉)の地位にあった(〈ゴードケ〉の主人であったかも知れない)。そこでこの文章の趣意は、こうなろう——〈(余の盟友ヘルマン・フォン・フースがヒルデスハイム市とフェーデの関係に入るときは、) 余 (ゴードケ・コンラドゥス) は、このフェーデについては、(当事者が) 和解するときであれ平和を交わすときであれ、はたまた争いを続けるときであれ、(彼) ヘルマン・フォン・フースと (行動を) 共にせんとす〉と⁽¹⁵²⁾。都市は当時幾人かの者と敵対の関係にあったか(または、その兆しをみせていたか) のようである。〈ゴードケ〉による通告には、この事情が背景にあった。

『ヒルデスハイム市文書集』所収のフェーデ通告状で〈ウァフェーデ(報復放棄誓約)を交わす (vororveidet)〉といった言葉がみいだされるのは本状のみ。この意味で注目される。しかも、本通告状には〈フェーデ (feide)〉の言葉もみえ、〈フェーデ〉と〈ウァフェーデ〉とが^{つい}対のかたちであられる。捕捉(捕縛)が契機となることでフェーデの関係に陥らんとするとき、当事者は(交渉をとおりし)〈ウァフェーデ〉誓約の締結に〈期待〉をよせる。この意味で、通告状 [9] に繋がる側面をもつ。なお本状には、これまで諸通行状が [iii] において必ず述べてきた〈名誉保持〉の通告文がない。異例のことである⁽¹⁵³⁾。〈加害 (schade)〉の行為については、しっかり述べられている ([ii]) のに。それに代わり、本状では上記のとおり〈ウァフェーデ〉に言及されていた。

23 長文通告状の一例——総括の意味をこめて——本節の最後に、長文の通告状をとりあげたい。長文の通告状自体珍しいが、ただ一般に、時代が経過するとともに通告状が長文化する嫌いが出てくる。われわれの事例では、長文だけあつ

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(3)

て、上述してきた、フェーデの通告事由の問題、およびフェーデの実行と加害の問題が比較的詳しく出ている。また通告状発行をめぐって関係する人たちのことにも言及がある。この意味で、本通告状 [11] を、本節総括の意味を込めとりあげたい。そこには、これまでの通告状にはなかったことがらや言葉がみえる。これまでとりあげてきた通告状の多くはヒルデスハイム市に向けられていたが、ここでは逆に、ヒルデスハイム市が発する。発する先は、ときのヒルデスハイム司教バルトルト (Bertolt) であった。

本通告状は、長文のためか文章の構成が変則的である。とはいえ、内容は総じて判り易い。ただ長文であるため、テキストに直ぐ向かう前に、概要を示しておくのがよいであろう。骨格部分は、既述の通告状 [1] をはじめ、これまでの通告状でみたように、[i] (〈敵〉とならん、と宣言する部分)・[ii] (フェーデ通告の事由を述べるところ)・[iii] (〈名誉保持〉をうたう箇所)に分けられる。

骨格部分に関し、4点述べたい。(a) 第1に、以上の [i] [ii] [iii] が既往の通告状ではこの順序のとおり述べられていたのとは違って、本通告状では順序よく並んでいない。いきなり [ii] の部分から始まっている。(b) 第2に、およそ通告状が長文化するのはなканずくこの [ii] の部分が詳しくなることによるが、案の定本状はこの部分が異例に長くなっている。そこで本部分 ([ii]) を読み易くするため、これを [iia]・[iib]・[iic] に別^{わか}ちたい。このうち [iib] は、フェーデ通告以前に司教側によって起きていた暴力行為のありようを生々しく描く。(c) 第3に、同じく判り易くする意味で [i] も [ia] と [ib] に分ける。後者 ([ib]) は、これまで紹介してきた通告状 (ただし通告状 [10] は除き) にはなかった事態を語っている。すなわち〈敵〉となる範囲を明確にする趣旨のもので、司教〈ゆかりの者ら〉の中で都市にとって〈敵〉となる者の範囲から除かれる人物が列挙される。この点では、直前の通告状 [10] でみた〈ハンス〉(フェーデ通告者〈ゴードケ〉がウェアフェーデを誓約した相手) が通告先から除かれた事例と同旨である。(d) 最後に [iii] についても、同様の意味で [iiia] と [iiib] に分けて読んでみる。[iiib] はお定まりの、通告者の〈名誉保持〉をうたうが、[iiia] はフェーデの実行と、これによる加害の問題をとりあげている。

以上の諸点（[a] [b] [c] [d]）を、テキストの中に入れてみると、通告状 [11] は次のとおりとなる。

[11] „Wettet, erwordige in god here Bertolt, bischop, [iia] so alze gy in juwer tokumpft tome stiftte to H. uns dem rade der stad to H. up unseme radhuse u. unsen gemeinen borgeren uppe der lovene hebben geloffliken redet, gelovet u. toegesecht in jegenwordicheit erbar heren, prelaten u. manschup des stifttes to H., uns to latende by gnaden, olden herkomende u. ock by older loffliker wonheit, u. so gy denne uns der geloffliken tosaage vakene u. mennichwarff sin neddervellich geworden u. uns der nicht hebben geholden, so gy dat in breven u. instrumenten geredet u. gelovet hebben, [iib] u. dorch ander frevel, vornement u. gewalt uns so boven rechtes vorbod tegen god u. recht aff-u. tovoer hebben laten vorbeden, unse vigende to unseme schaden husen u. hegen, de uns by nachtslapender tid hebben unsen teygelhoff gebrant u. unse arbeitende lude mit wapender hant gejaget van der wisch uth oreme arbeide u. hebben eynen unser borger vorsetliken dorch syn liff scheten laten vor unser stad twischen den tunen u. dejenne, de uns aff-u. toforen, der nedderslan u. or war nemen u. vornichtigen u. vorder an deme lesten avende des vastelavendes itlike tune unsen borgeren tobehorich by deme Barchtorpe bernen laten, [iic] dat denne alle is gescheyn vamme Sturwolde aff u. an, allet unvorschuldes dinghes, unvorclaget, sunder veide u. vorwaringe, [ia] daromme u. ock vorder umme ander gewalt u. sake so willen wy borgermester u. rad, gemeinen borger u. inwoner mit unseme hovetmanne, knechten, deneren, hulperen u. medebringeren juwe u. der juwer lant u. lude vigent syn, uns sodaner gewalt u. bosen vornemende to erwerende u. uptoholdende, [ib] uthbescheiden dat werdige cappitulum to H., den edelen u. wolgeboren graven Hinrike van Swartzeborch domproveste to H., den edelen u. wolgeboren graven Hinrike van Wunstorpe u. vort alle dejenne van der manschup, de, wy wetten, uns nicht entigen raden ed. daden in dusser gewalt u. bosen vornemende, u. ock de van Alvelde, Bokelem, Gronauw, de stad to Peine, [iia] u. yfft wy denne so mit unser meynheit, hovetmanne, knechten u. deneren up juw ed. de juwe, gik tostan, sochten ed. soken leten u. uppe de uns

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(3)

so mede denken to vorwoldigende u. jennigen schaden deden an rove, brande, morde ed. dothslage, wu de schade were, worde ed. toqueme, des schaden vigent wil wy sin [iib] u. willen gik ed. de juwen u. nemande darto antwoorden u. willen uns des vor uns u. vor unse gemeinen borger, inwoner, hovetman, knechte, dener u. medebringer unse ere to guten tiden nochafftigen wol vorwart hebben, (後略)⁽¹⁵⁴⁾

(I) そこで、先ず、直前のテーマすなわちフェーデの実行と加害の問題からみていきたい。関係の部分は [iia] である。

先ず (i)、この部分の末尾には、これまで紹介してきた通告状には無かった文言がみえることから話を進めよう。〈des schaden vigent wil wy sin〉である。いささか判り難い文章だが、これを文字とおり読めば〈われら（ヒルデスハイム市）は、害の敵とならん（もしくは、害について敵とならん）〉となる。この文章は、むしろ、これ単独で充分理解しうる、というものではない。じつは、すぐ前に述べられていた〈wu de schade were, worde ed. toqueme〉（この言葉は、既往の通告状にもみいだされたが）に繋がって語られているものである。そこで、さしあたって、これと結びつけて紹介すると、こうである。〈いかなる害が生じようとも、これが生じるときは、われら（都市）は、害の敵とならん〉と。では、これは、どのようなことをいおうとしているのか。

これを明らかにする前に、最初に、〈害〉ということについて一言しておきたい。本通告状 [11] における基本命題（つまり〈敵たらん〉）は、〈貴殿の敵たらんとし、貴殿のラントおよび人民の敵たらん（juwe u. der juwer lant u. lude vigent sin）とす [ia]〉であり、またもっと一般的な表現でいえば〈余…は貴殿の敵となるなり（ek…wil juwe figent sin）〉（通告状 [1]）である。ここからみて、〈われらは、害の敵とならん〉（上記）とは、〈敵たらん〉というのを、別の側面から語る言葉である。別の側面とは〈schade〉の面である。〈schade〉とは、なにか。フェーデ通告の発し手側からみれば「加害・為害」を、受け手側からすれば「被害・受害」を意味する。通告が通告の域に止まらずその実行（フェーデの実行行為）の段階に到ると、双方の側に大なり小なり「損害・損失」が発生する。これも〈schade〉の意味に入ってくる。

「加害（為害）」・「被害（受害）」・「損害（損失）」のこれらに共通する現象は、文字とおり〈害〉ということである。〈schade〉はこうした〈害〉を意味する。では〈害〉そのものはどんな意味か。常識的には損・不利益などを指そうが、ともあれ現実には〈schade（害）〉とは、以上の諸態様を含む、ふくらみをもった現象を意味する言葉となる。そのため、通告状で〈schade（害）〉の言葉が「加害（為害）」・「被害（受害）」・「損害（損失）」のうちいかなる意味で使われているのかについては、そのつど見極める必要がある。

(ii) こうした事情の中で、〈われら（ヒルデスハイム市）は、害の敵とならん〉とあるのは、いかなることを指すのか。それは、言葉を補って示せば〈（われらが加える）害の敵とならん〉ということ。では、この意味するところはなんであろうか。

これをみる前に、直前に述べられていた、もう1つの文章（[iia]）をみてみたい。便宜上、これにさらに[イ][ロ]の区分を入れ込んでみる。〈[イ] yfft wy denne so mit unser meynheit, hovetmanne, knechten u. deneren up juw ed. de juwe, gik tostan, sochten ed. soken leten [ロ] u. uppe de uns so mede denken to vorwoldigende u. jennigen schaden deden an rove, brande, morde ed. dothslage〉と。この文章で、やや難解なのは〈up juw ed. de juwe〉（[イ]）であり、〈uppe de uns〉（[ロ]）である。これは、どうも対になっている文言のようにみえる。あたかも、諸文書において契約などの当事者を指し示すのに、例えば〈uppe eyne (szidt)〉（一方は）、〈uppe ander szidt〉（他方は）といったように。そこで、この点を考慮して上記文章を解すれば、こうなる。[イ] 〈われら（都市）は、貴殿（司教）もしくは貴殿ゆかりの者らのいずれについてであれ、貴殿ら（gik）を探索・捕捉・追跡するとき〉。ここには司教と司教ゆかりの者ら（司教側）とにたいし加えられる攻撃（〈害〉）について述べられる。なお、ここにみえた〈tostan, sochten ed. soken〉は全体として〈捕捉・攻撃・襲撃する〉の意味にあり、フェーデ通告状にみる、加害行為に関わる常套語であった（上述）。[ロ] 〈かつ、われら（都市）ゆかりの者らについていえば、われらは、（貴殿〔司教〕らにたいし）略奪・放火・謀殺・故殺によって暴力を行使せんとし、これによ

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(3)

てなにかしらの害を及ぼすことになったとき〉。ここには、とくに都市ゆかりの者らによる攻撃(〈害〉)についての記述がある。そして、こう続くわけである。これらいずれの〈とき〉であれ、〈いかなる害が生じようとも、これが生じるときは、われら(都市)は、害の敵とならん〉(既述)と。要するに〔イ〕、〔ロ〕のいずれであれ、これが述べんとする趣旨はこうではないか。攻撃(フェーデの実行)は、通告状の差出人(都市)、差出先(司教)といった直接の当事者にたいし起こりうる、また直接の当事者によってなしうる、のみではない。双方それぞれの「ゆかりの者ら」にたいしても起こりうるし、また「ゆかりの者ら」によってもなしうる。このようなすべての加〈害〉、またこれに伴う被〈害〉についてヒルデスハイム市は〈害の敵とならん〉と宣言するものである、と。

では、この宣言は本来的になにをいおうとしているのか。この点を考えるのに、じつは、本件と似た通告状の事例——しかも、簡便な——があるので、これを引いてみたい。一世紀ほど前の1396年のものとされる短文の通告状であり、ハノーファー市がハインリヒ・フォン・エシェルテ(Escherte)なる者(おそらく、ブラウンシュヴァイク＝リュネブルク大公ゆかりの者)に宛てたもの^(154a)。その末尾にこうみえる。〈vñ [we de rad to honouere...] wolden des schaden iowe vyende wesen (そして[われらハノーファー市参事会…は] 害について貴殿[ハインリヒ…]の敵たらん)〉と。ここで肝心なのは、この直前の文章であり、便宜上(a)(b)を挿入して紹介しよう。〈(a) schude iv dar schade an van vns eder den vnsen. wo de schade schapen were, (b) des wolde we de rad to honouere...vnse ere an iw vorwaret hebben ([a] そこに、われら[ハノーファー市]によって、あるいはわれらゆかりの者らによって害が生じるとき、この害がいかなるものとなろうと、[b] われらハノーファー市参事会…は貴殿[ハインリヒ…]にたいしわれらの名誉を保持せんとするものなり)〉。こうみてくるに、〈[われらハノーファー市参事会…は] 害について貴殿[ハインリヒ…]の敵たらん〉とは、都市がフェーデ実行になったときに加えることになるはずの害(加害・為害)についてその責めを負わぬ(〈名誉を保持する〉)ことを、別の言葉で語るものだったことが解かる。じつは、その点自体は、本通告状[11]にも後述のとおりみいだし

れる ([iib]) のだが、当面の問題についてハノーファー市の通告状が簡便に述べていたので、比較のためにも紹介したのである。

(iii) 通告状のこの文章 ([iia]) には、「加害」と「被害」のダイナミズム(動力論)が語られている。フェーデの実行による「加害」には「被害」が伴う。これは「損害」を意味する。「損害」には「加害」によって応える。これは「報復」というかたちをとる。〈害の敵とならん〉(あるいは、〈害について [貴殿の] 敵とならん〉) とは「報復」の宣言と受けとれぬこともない。

一方で、ここには、フェーデの実行行為にたいする、或る意味の〈抑止〉(もしくは、実行の回避)の思考が示唆されてはいないか。フェーデ通告の前にすでに起きていた「加害」、あるいは通告の後に生じる「加害」の行為には、それぞれ同じく「加害」によって応えることを表明する(〈害の敵とならん〉) 通告状の書き手に、〈損害を厭う〉意思がまったくないとは言いきれない。この点はもっと詰めて考えねばならないが、もし「害を嫌う」といった意図がそこに窺いうるのとすると、その言葉(〈害の敵とならん〉)には必ずしも〈和解への折衝・交渉〉の途を閉ざすほどの意味は、ないのではないか。

むしろ、この言葉には、通告者側による〈加害〉行為をジャスティファイしようとする意図もあらわれている。つまり、フェーデの実行たる〈加害〉は、フェーデ通告によって通告者が〈貴殿(被通告者)の敵〉となったことによって初めて生じるのであり、非フェーデの行為(無法者・無頼漢による純然たる略奪、といった行為)による結果ではない、ということ。この点は、いみじくも〈des schaden vigent wil wy sin〉に続く直後の言葉〈willen gik ed. de juwen u.nemande darto antwoorden〉([iib]) すなわち〈われら(ヒルデスハイム市)は、貴殿(ヒルデスハイム司教)、あるいは貴殿ゆかりの者にたいし、および他のいかなる者にたいしても、それについて責めを負うことは、なからん〉とあるところから、よく判る。ここに〈それについて(darto)〉とは、通告者側が加害行為者となること、言い換えれば〈害の敵〉となることについて、ということである。〈責めを負うことは、なからん〉とは〈名誉を保持す(unse ere wol vorwart)る〉ことを指し、しかも名誉を保持するのは、当事者が〈充分とおもうほど長きにわたって(to

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(3)

guten tiden)〉([iib])なのである。理論上は、ほぼ終生とみてよい。当事者とは〈わが市民・傭兵隊長・傭兵・従者ら〉(上述)であり、これに加え〈住民 (inwoner)〉および〈通告状持参人 (medebringer)〉であった ([iib])。後者 (〈通告状持参人〉) は、通告状を相手に渡す役目 (役目にはむろん報酬が伴う) に就いた使者を指すとおもわれるが、そうした名が通告状にみえるのは珍しい。

(Ⅱ) 〈害の敵とならん〉とあるのは、これまで紹介の通告状にはみられなかった言葉であったが⁽¹⁵⁵⁾、特定の者や団体をフェーデ通告先の対象から無条件に除外する (uthbescheiden) ことを述べる ([ib]) ところにも、これまでの通告状にみられなかった (既述のとおり通告状 [10] は一市長を除外するが、ただしこれには、ウェアフェーデ誓約が介在していた)。本通告状 [11] において、除外される者として名をあげられたのは、四者あった。(i) ヒルデスハイム司教座聖堂参事会 (cappitulum to Hildensem)、(ii) 2人の伯 (シュヴァルツブルク伯ハインリヒ、およびヴンストルフ伯ハインリヒ)、(iii) 「封臣たち (manschup)」、(iv) 4つの都市 (アルフェルト [Alfeld]、ボッケネム [Bockenem]、グローナウ [Gronau]、パイネ [Peine]) である。これら四者が除外されたということは、彼らが〈司教ゆかりの者ら〉に属するもの、とヒルデスハイム市が先ず認めていたことを裏づける。〈司教ゆかりの者ら〉と認めているからこそ、フェーデ実行のさいには〈害〉を加えうる相手となる。そこでなんらかの理由によって、彼らを加害から外す必要があった。

では、除外はどんな理由によっているのであろうか。比較的判り易いのは、(iv) 4つの都市の場合である。諸都市は、むろんヒルデスハイム市同様、司教 (都市君主) 支配下にあるが、他方でヒルデスハイム市と同盟関係にあった。このことから、通告先から除外されたとみられる。現に、司教が司教領国の都市、農村に求めた〈ビール税 (zise)〉の賦課にたいしヒルデスハイム市はアルフェルト市と同盟を交わした (1482年3月5日) 事例がある^(155a)。次に (iii) 「封臣たち (manschup)」の場合も判り易い。彼らは、司教座の封臣を指している。彼らについて、通告状 [11] はこう書く。彼らは、〈かの暴力や悪しきふるまいの点で、われわれ (ヒルデスハイム市) に敵対するような言動は、差し控えたこと

を、われわれ（都市）は知っている。〉彼ら〈封臣〉らは、都市と司教との争いの中でいわば「中立の立場」をとった（あるいは、反・ブラウンシュヴァイク大公の立場にあった）のである。他方（i）聖堂参事会自体が除外の対象となっていることは、どう理解すればよいか。3年ほど前の1481年12月29日聖堂参事会とヒルデスハイム市参事会とは司教の「ビール税」賦課をめぐる相談を交わしたが、このことを記した証書⁽¹⁵⁶⁾によれば、聖堂参事会は課税已む無しとして同意して („vulbordet“) いた。したがって、聖堂参事会が除外されたのは、課税問題によっていない。結局除外理由は不詳である。最後に（ii）シュヴァルツブルク伯ハインリヒは当時聖堂参事会首席（domproveste to H.）の職にあった。ヴンストルフ伯ハインリヒも聖堂参事会員の一人であった⁽¹⁵⁷⁾。ちなみに、こうみると、双方の伯は名立たる世俗の高級貴族であると同時に、高位聖職者であった。いわば「半俗半聖」の身にあった。ただ、両伯が除外されていることと、聖堂参事会自体が除外の対象となっていることがどう関係するのかは、不詳。上記1481年12月29日の証書によると、当時聖堂参事会員は、首席 („Eggert van Wenden“) 以下17人を数えた。ただ、聖堂参事会員の身分・出自を探る手がかりは同証書からはえられない⁽¹⁵⁸⁾。通告状 [11] 当時（1485年2月とされる）の聖堂参事会員数は不明。いずれにせよ、会員全部が除外の対象になったとみられるが、その中で、両伯がとくに名をあげられたのは、どうしたわけなのか。おそらく、司教にたいし、都市に理解を示していたことによろうが、具体的な点は判らない。

ただ、上記の者や団体が除外されたということは、〈和解への折衝・交渉〉の途が探られるときには、仲介役がそれら者の中に求められることになってくる。この点が重要なのである。以上のように除外の方法をとることで、都市は、折衝・交渉の余地を予め作っていた、と考えてよいであろう。こうみえてくると、フェーデ通告状によって通告の宛先としてじっさいに都市が念頭にいていた人物は、司教当人の他にはだれであったのか。〈司教ゆかりの者〉としては、だれが残るのか。司教お抱えの、ミニステリアーレン、従者・郎党・召使（奉公人・勤務者）、司教座の騎士・傭兵と、これらの従者、また司教付聖職者・支援者となろうか。とくに傭兵らが念頭にあったのではないか。しかも、じっさいにフェーデ実行の

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(3)

被害に遭遇するのは、司教自身ではなく、こういった司教〈ゆかりの者〉の身体や財となろう。

(Ⅲ) 最後に、通告状 [11] がもっとも多くの文章を連ね記していたのは、司教側による〈かの暴力や悪しきふるまい〉(上記)の諸態様であった。しかも、ヒルデスハイム市側によるフェーデ通告の趣旨は、まさに〈そうした(既述の)暴力、および悪しきふるまいにたいし、身を護り、抗うこと(uns...to erwerende u. uptoholdende)〉にこそあった([ia])。そこで、〈かの暴力や悪しきふるまい〉である。これを述べるのが、[iia] および [iib]。このうち、前者([iia])は、司教側が加害行為に到った、背景となる事情を簡潔に記し、後者([iib])は加害行為の細目を描写する。小規模ながら、フェーデ通告状から、時代の「犯罪現象(Kriminalität)」の一端を知る手がかりがえられる諸事例の一例となりうる。ともあれ、いささか言葉を補いつつ、都市参事会が司教にたいし切切と訴え、その責めを問わんとするところをみていくと、以下のとおりとなる。

(i) フェルダン(Verdan)の司教バルトルト・フォン・ランズベルク(Barthold von Landsberg)はフェルダンにおける地位(„administrator“としての)を保持したまま1481年ヒルデスハイム聖堂参事会からヒルデスハイム司教に選出され、ブラウンシュヴァイク大公に伴われ司教区に到着、その任に就く⁽¹⁵⁹⁾。さてそこで通告状[11]の、先ず[iia]である。司教は、市庁舎バルコニーにおいて(具体的日時は判らない)、市参事会員らに向かい、都市伝来の法と慣習の遵守を誓い、都市が古来の法と慣習を享受しうることを保証した。〈にもかかわらず(denne)——と、市参事会はうったえる——〈いくども約束を破つ(neddervellich)た。〉司教が文書によって誓約してきたことを守らなかった、と。これは具体的には、極度の財政難に陥ったバルトルトが〈ビール税〉(消費税)の導入を図ったことを指していた^(159a)。財政難に陥ったのには、大きく、教皇庁に収める高額の「司教就位確認料」のゆえであり、またヒルデスハイム前司教由来の累積債務が理由となっていた⁽¹⁶⁰⁾。この中で「消費税」の導入が図られたが、これは都市にとって前代未聞のこと(„de nigen unwontlike size over der stad van Hildensem beyre“)であり^(160a)、以後論議・紛争を生んだ。

(ii) 次いで *[iib]* である。司教側がおこなったとされる、数数の加害行為が生生しく語られる。これに到る経緯を若干摘記すれば、こうだ。バルトルト司教の〈ビール税〉導入提案は都市側の抵抗に遭う。司教はハルバーシュタット市に長文の書簡を送り、ヒルデスハイム市を説得してくれるよう仲介を請う(1482年3月12日)が⁽¹⁶¹⁾、結局効を奏せず税の導入を断念せざるをえなくなった(司教と、ヒルデスハイム市、アルフェルト市との和約[1482年7月29日⁽¹⁶²⁾])。しかし、その後も、領国支配のためにヒルデスハイム市に圧力をかける司教と、都市との紛争は続く。この中で、ブラウンシュヴァイク大公ヴィルヘルム、ハインリヒ父子が司教と繋がり、たいし都市はザクセン都市同盟諸都市、ハンザ諸都市の支援をとりつけたりして、紛争は研究史上いう「大フェーデ」の様相を帯びてくる。1486年12月20日に交わされた、司教との和約の当事者には、ヒルデスハイム市の他、ハノーファー、ゲッティンゲン、ブラウンシュヴァイク、リューネブルク、マクデブルク、ゴスラルなど諸都市10市が名を連ねた⁽¹⁶³⁾。

とにかく、本通告状[11]に知られる加害事例は、こうした「大フェーデ」の一環として、しかもその比較的初期段階(1485年2月頃か)において起きていたもの。じつは、司教側による加害の態様やありようについては、市参事会が別途記録を作成していた(1485年[月日不詳])。一種の手控え帳である。ここには、加害行為(これが、中心の記述となっている)等についてその要点が全31項目にわたり(同年1月28日から9月27日におよぶ)書き留められていた⁽¹⁶⁴⁾。通告状[11]が細目を掲げていた事件(下記)に関わるとみられる項目も含まれている。そのため、当記録(以下、「備忘録」と呼ぶ)もあわせ参照したい。

通告状にあがっていた司教側の加害行為は、大筋以下のものである——加害におよんだじっさいの主体はもちろん司教自身ではなく、司教とは別の者である。すなわち、都市にとってかねてからの〈敵〉(〈われらが[都市の]敵〉)であった。換言すれば〈司教ゆかりの者〉である。〈封臣ら〉でないとすればミニステリアーレン⁽¹⁶⁵⁾か、あるいは傭兵らである。では、司教自身がフェーデ通告の相手先となり、その責めを問われているのはなぜか。それは、彼がそれら〈敵〉を〈匿った(husen u. hegen)〉ことにあった。というのは、匿われることで隠れ家

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(3)

を保証され〈敵〉は加害行動をほしいままにすることができ、このことが〈われら(都市)に損害を(to unsereme schaden)〉もたらすことになった、とあるのが都市側の言い分であった。では〈損害〉とは、なんであろうか。

いわく〈われらが(都市の)敵〉は、(a) 夜間〈われら(都市)の煉瓦製造場(unsen teygelhoff)〉に火を放った。製造場は〈都市郊外に(vor Hildensem)〉設けられていた⁽¹⁶⁶⁾。また(b) 都市の〈採草地〉で柳の伐採に従事していた者を武器で威嚇しその場から追いやった。「備忘録」によれば、これは1485年2月4日の事件。その後用心のため市参事は、現地に弩や射撃砲を配置し、また都市従者や傭兵を配備して警戒にあたらせ、伐採人たちを護らねばならなくなった⁽¹⁶⁷⁾。これは、都市にとってコストがかかり〈損害〉をもたらす。(c) さらに〈敵〉は、市民の1人に〈悪意をもって(vorsetliken)〉矢を射かけ、その身体を刺した(「備忘録」では2月10日のこと。被害者はハンス・ヴェストファルなる者であった⁽¹⁶⁸⁾)。矢は、都市を囲む〈防御柵(tunen)〉の間隙から射かけられた。(d) 〈われらの都市を往来する(uns aff-u. toforen)〉者を(市門の辺りで)待ち伏せ(war nemen)、襲って負傷させた。最後に(e) 謝肉祭最終日(2月21日)の夜〈バルヒトルペ(の集落)近在にあった〈防御柵(tune)〉が焼き払われた(ただ「備忘録」ではこれは2月15日のことであった)。この〈柵〉は、市民共同の製作になるもの。〈防御柵(tune)〉とは、村落(Dorf)領域に知られる⁽¹⁶⁹⁾ „Zaun“ (etter)に相当し、一種の境界を標示するもの(と同時に、「平和領域」を画するもの)。以上のようにみえてくると、種々の加害行為は大筋ヒルデスハイム市外から発せられていたことが判る。このことは、次の事情に関係してくる。

(iii) すなわち最後に、加害の(a) 発進地と、その(b) 性格の点である。これが[iic]で語られる。先ず(a) 発進地については、〈シュトイエルヴァルトから(vamme Sturwolde [Steuerwald])〉とある。しかも、ここが同時に帰着場所でもあった(aff unde an)。上記「備忘録」によれば2月10日ハンス・ヴェストファルが飛矢の被害に遭遇したのも〈シュトイエルヴァルトから起きた(dat scach van Sturwolde)〉。じつは、この場所は、ヒルデスハイム市郊外に存した司教城館である⁽¹⁷⁰⁾。この執務室で司教は文書を発行したりしていたが、同時

に攻撃者（都市の〈敵〉）の宿泊場所でもあった。ここから、彼らは都市に加害をしかけるため出立し、かつ帰着する。或る意味（すなわち、フェーデ実行の過程で、という意味）で当該城館は、実行者（攻撃者）にとって「避難城塞」でもあった。

次に（b）こういった加害の性格の問題である。それはこうである。〈それら（加害の）すべては、（都市にとって）いわれなき（*unvorsculdes*）行為であり、事前に裁判所に訴えの提起されていない（*unvorclaget*）、かつ前もってフェーデ通告のない（*sunder veide u. vorwaringe*）行為であった〉と。要するに司教側の加害行為は、都市にとって身に覚えのない（加害を被る理由のない）もの、さらに〈フェーデの法〉に背く——事前に告訴のない、また通告のない、との意味で——行為であった。（ここにも、裁判・訴訟の問題が絡んでいる事情が判る。）しかも、こうした行為のゆえに（*darumme*）、かつ〈（司教側による）別の暴力と、もめごと（*ander gewalt u. sake*）とのゆえに〉市参事会は、司教と司教の〈ゆかりの者〉とに宛て〈貴殿の敵たらんとし、貴殿のラントおよび人民の敵たらん [*ia*]〉（上述）と、本通告状は続くのである。これを要するに、司教の加害行為は司教からすればフェーデの実行行為のつもりであったが、ただ、これには、少なくとも都市の言い分では、告訴や通告の行為が欠如していたことになる。

以上が通告状 [11] の語る全体模様であるが、このように本通告状が長文となったのは、どうしてか。（a）それはあえていえば、通告の事由を子細に語ることで、つまり司教側から受けた被害の状況を詳述する（*[iia]* *[iib]*・*[iic]*）ことで、ヒルデスハイム市が司教に通告状を発するゆえんを、通告先から除外する四者（上記）に判らせ、通告の正当性をうったえ、事情によってこれに交渉・折衝の仲介を取らせようとしたことが考えられる。（b）もう一点推測できるのは、こうである。被害の状況の詳述すること（市参事会が「備忘録」[上記]を作成するのもその1つ）は、ある意味「被害記載帳」つまり被害リスト⁽¹⁷¹⁾を示すことに他ならない。このリストこそは、フェーデが仲裁裁判等をとおし和解に到るときに、ものをいう。被害の賠償請求の場において、である⁽¹⁷²⁾。フェーデに到らざるをえなかった、フェーデ前の被害の状況を長長しく記す必要があったのは、

こうした賠償問題が絡んでいた、とも考えられる。

24 まとめ 本節最後に、当面暫定的ではあれ、一応のまとめを記しておきたい。暫定的というのは、通告状の一種ともいうべき〈名誉保持告知状〉の分析(次節)を俟って初めて、通告状について或る程度最終的な結論がえられるとおもわれるからである。

さて、本稿および前稿所掲のヒルデスハイム・フェーデ通告状(全11通)はいずれも、全体的にみてその内容は簡素であり、しかも要をえた構成をとっていた。直前の長文[11]のものでも簡素な文章が組み合わせられ、内容的にあまり紛れるところはなかった。

そこで、以上通告状を通覧したところを基盤にして、通告状をめぐるさしあたり重要とおもわれる点を指摘したい。フェーデ通告の事由が今日の基準でいえば刑事的事件の他、民事的事件にわたり幅広い事件におよんでいるということ⁽¹⁷³⁾ 以外に、とりわけ注目されるのは大きく、(i) 第1に、フェーデの実行の問題、(ii) 第2に、交渉・折衝の問題、最後に(iii) 裁判、の問題である。

(i) フェーデ通告状発行の主たる意義、少なくとも意義の1つは、フェーデの実行が現実には起こりうることを公然と告知することにあった。しかも、フェーデ実行は、略奪であれ放火・殺害(故殺・謀殺)であれ、方法・手段、また規模は無限定・無制限であることが、定型的文言でもって明示的に告げられる。明示的に告げられなくとも、それが当然前提にされている。〈フェーデの実行行為は徐々にエスカレートしていくぞ〉といった言い方は、とらない。加害行為は、端から最大のものがありうる、と宣告される。もちろん、現実には端から最大のものがあるかどうかは格別として、それがありうることを公然と告げること——これが、重要である。

(ii) 端から最大の加害がありうる(言い換えれば、おもいつきうるいかなる手段・方法をもとる)との、通告者側による宣告は、通告状の受け手からいえば、相当の〈威嚇〉となり〈脅威〉を意味することは間違いない。当初から、予め極力防御・予防の措置を講じておかななくてはならぬ。しかし他方では、市民の日常の正業を確保しなければならぬところからいって都市の防御能力には限界がある。

勢い傭兵に依存することになる。ただ、これはこれでコストがかかる。となれば、交渉・折衝の途がここで浮上しうると考えられる。しかも、これはフェーデ通告状の受け手だけの問題ではなく、発し手も望むところといえるのではないか。というわけは、フェーデの実行は通例抵抗・反撃に遭遇し、こうなると、発し手自身もまた被害・損害を覚悟しなければならないからである。

(iii) 裁判の問題も通告状に出現する。フェーデの事例においては、とりわけ「裁判拒否」(例えば、当事者が出廷せぬ、訴訟が遅延する、不当な判決である、とか)に遭遇したとの口実が通例裁判の問題として上っている。申し立てられている口実がもっともなもの(道理のあるもの)なのかどうかは、相手側の言い分もあることゆえ、ことばどおりに受け取れぬことも少なくない。しかし、ともあれ、もめごとについて通行状の発行以前に、まずは裁判(仲裁を含む)に訴えねばならぬ(訴えた結果が満足、あるいは不満なものになろうとも)との考え方は、或る程度慣例化していたものとみてよいのではないか⁽¹⁷⁴⁾。他方、訴えられた側も訴訟に応じるとなれば、なんらかの対抗手段を投入するはずである。これが裁判を長引かせ、フェーデ通告におよぶ事由となることがある。

(続く)



ファーレンギン (Valengin) 伯の使者がベルン市にフェーデ通告状を届ける

Bilder aus der Spiezer Chronik des Diebold Schilling von 1485. Stadtbibliothek Bern
(Justiz in alter Zeit. Band VI der Schriftenreihe des mittelalterlichen Kriminalmuseums
Rothenburg ob der Tauber 1984, S.166 より。)

注

- (123) UH Bd. 2 Nr. 1221 ([c. 1400]).
- (124) 拙稿「ラントツヴィンガー (Landzwinger) とはなにか—ドイツ刑事法史の一断面—」『熊本法学』122 (2011) 50頁、77頁。
- (125) 「ことばの暴力」の問題について代表的な一研究として、コンスタンツ市の事例を取りあげた Schuster, Peter, Eine Stadt vor Gericht. Recht und Alltag im spätmittelalterlichen Konstanz, Paderborn u. a., 2000, 72-86を参照。
- (125a) このように多数の者がフェーデ通告にあたった事例として前注 [84] 参照。また61人が連名でドナウヴェルト市にたいしおこなったシュヴァーベンの一事例として Die Urkunden des historischen Vereins für Schwaben und Neuburg, 1. Abt., in: Zeitschrift des Historischen Vereins f. Schwaben und Neuburg, 3. Jg., 1876, p. 332 f., Nr. 36 (1432 Juni 28)。
- (126) Borst [106] 182 (『中世ヨーロッパ生活誌1』 [106] 171頁 (今や「都市は、カプチン会、アウグスチノ会、ドミニコ会、カルメル会の修道服姿なしには考えられない」) 参照。
- (126a) 国王ルードルフ一世の帝国平和令 (1287) 年から14世紀初葉フランケンの平和令について Sellert, Wolfgang, Geiselnahme und Pfändung als Gegenstand spätmittelalterlicher Landfrieden, in: Buschmann, Arno / Wadle, Elmar (Hg.), Landfrieden. Anspruch und Wirklichkeit, Paderborn/München/Wien/Zürich 2002, 240 (Anm. 88)-241 (Anm. 91) を参照。
- (127) UH Bd. 2 Nr. 1179 ([c. 1380-1400]).
- (128) ゲライトについてさしあたり Koehler, B., Geleit, in: HRG 1, Sp. 1481-1488; Lingelbach, Gerhard, Geleit, in: HRG I, 2. Aufl., Sp. 37-42. なおとくに都市社会のそれについて、また都市参事会のもつゲライト権の由来について Haferlach, Alfred, Das Geleitswesen der deutschen Städte im Mittelalter, in: Hansische Geschichtsblätter Jg. 1914, Bd. 20, 1-172, insb. 77 ff., 80 (Anm. 6: Hildesheim), 82 („in der Velighung 《des Beklagten》; „die allgemeine velicheit auch des klägerischen Gasts“) を参照。

- (128a) 拙稿「報復としての差押えと中世社会」中村直美他編『時代転換期の法と政策』（成文堂・2002）120頁以下。
- (129) 比較的近時の研究 Kraß, Guido, *Das Arrestverfahren in Frankfurt am Main im Spätmittelalter*, Frankfurt (M) 1996もその冒頭（S. 38 f.）からこのテーマをとりあげている。なお、Amend, Anja, *Arrest, Arrestverfahren*, in : HRG Bd. 1, 2. Aufl., Berlin 2008, Sp. 302-308 ; Buchda, G., Kummer, in : HRG 2, 1975, Sp. 1257-1262 ; Orgis, W., *Repressalienarrest*, in : HRG 4, Sp. 913-916. また拙稿「報復としての差押え——中世後期ドイツの都市史料から——」『熊本法学』95（1999）109頁以下。
- (130) UH Bd. 3 Nr. 958 ([c. 1400-1420]).
- (131) Cf. UH Bd. 3 Nr. 46 (1402 : „Hinrico slip rectore parrochialis ecclesie sancti Lamberti“), 760 (1416 : „Dyderike Welleborne perner to sunte Lamberte“).
- (132) *Niedersachsen und Bremen* (Handbuch der historischen Stätten Deutschlands 2), hg. v. Brüning, Kurt, 4. Aufl., 1976, 230.
- (133) 山田欣吾「ヒルデスハイム司教コンラート（二世）の領国形成政策（1221-1246）」同著 [82] 86頁。
- (134) UH Bd. 2 Nr. 526 (Celle 1383 Mai 11.).
- (135) UH Bd. 2 Nr. 524 : „unde wanne de rad van us esscheden eder esschen laten, so scolde we van stunden an der vient werden, mit den se to krighe, to orleghe komen weren“
- (136) 後注 (138) 本文参照。
- (137) UH Bd. 2 Nr. 1222 ([c. 1400] Aug. 20).
- (138) „, [iii] u. (ik) wilt juw darto nicht antwerden“ (UH Bd. 2 Nr. 1222).
- (139) Freytag [11] 280 (und 314 in : hg. v. Pleticha, Heinrich [11]).
- (140) Patze [75] 279 („den Fehdegegner durch Schädigung…seiner wirtschaftlichen Grundlagen zu zwingen“), 281 („Schädigung der ländlichen Wirtschaft“); Kneppe, Cornelia, *Landwehr und Fehde. Zur Funktion und Entwicklung eines spätmittelalterlichen Wehrsystems*, in : Ravensberger Blätter, Heft 1, Januar 1996, 47 („ökonomische

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(3)

Grundlage“).

- (141) Algazi, Gadi, Herrengewalt und Gewalt der Herren im späten Mittelalter, Frankfurt (M)/New York, 1996, 132 : „Die adlige Fehde ist dadurch gekennzeichnet, daß der adlige Fehdegegner selbst, seine Verwandten und seine Residenz von direkten Tötlichkeiten weitgehend verschont blieben. Nicht der erklärte Feind war in der Regel Hauptziel der tatsächlichen Feindseligkeiten, sondern seine Bauern.“
アルガジ所論については論議が少なからずある（この場では、詳細は省く）ので、念のためその見解の一端を原文とおり紹介した。なお、ゲッツ、ハンス・ヴェルナー（Goetz, Hans-Werner）（轡田収他訳）『中世の日常生活』（中央公論社・1994）246頁（「敵の田畑を焼き払う」）も参照。
- (142) ゲッツ『中世の日常生活』[141] 246頁（「城を包囲して攻めたり」）参照。
- (143) Algazi [141] 211 („übermütigen’ Kaufleuten und Bauern“), 213 („Bauern wie Kaufleuten“), 218 („Bauern und Bürger“), 221.
- (144) シューベルト [106] 169頁以下。
- (145) この点に関し、都市の家屋のありようからシューベルト [106] 187頁参照。Cf. Kneppé [140] 47 („durch Brandpfeile“).
- (146) UH Bd. 7 Nr. 541 (1465 Juli 22).
- (147) ヘルフォルト市におけるそっくり同様の事例（1437年）としてPape [22] Nr. 249 : „ik·····wil din vigent wesen myt mynen helpers umme schulde willen, de ik dij hebbe totesegende.“ この点では、ザクセンとヴェストファーレンとの類似性がみえる。
- (148) UH Bd. 7 Nr. 433 ([1462]). 文中([iii])の[icht]は、引用者(若曾根)が補ったもの。
- (149) 拙稿「血讐とその処理について—ドイツ中世後期の都市とその周域とにおける—」『熊本法学』102 (2003) 135頁以下参照。
- (150) UH Bd. 2 Nr. 942 ([1397]).
- (151) UH Bd. 7 Nr. 769 (1473 Jul. 19).
- (152) 文中の „in Hermens vamme Husz sone frede u. unfrede“ に相当する類似の定

式文言がヴェストファーレン、ヘルフォルト市にたいする次のフェーデ通告状にみえ、理解にあたってはこれを参考にした。„Wetet, borgermester, rad…der stat Hervorde, dat wi, Jurgen van Lathusen…willen mit iu in aller veyde unde vorwaringe sitten, also Hartman van der Molen myt iu daranne sit unde teyn uns des in sinen vrede unde unvrede. Unde willen des unse ere an iu vorwart hebben.“ in: Urkundenbuch der Stadt Herford [22] Nr. 295 (1443 Aug. 5).

- (153) 前注 [147] であげたヘルフォルト市にたいする、類似の通告状では、きちんと、〈名譽保持〉通告文の記述がみられる: „Unde ik wil des myne ere myt mynen helpers an dij vorward hebben.“

- (154) UH Bd. 8 Nr. 93 ([1485]).

- (154a) Sudendorf [73] Bd. 8 (1876) Nr. 107 ([1396]).

- (155) ただし、すでにUH Bd. 7 Nr. 67 ([1451]) には、同様の文言が知られる。
ただ、これについては次節でふれたい。

- (155a) UH Bd. 8 Nr. 29 (1482 März 5).

- (156) UH Bd. 8 Nr. 25. 「ビール税」をめぐる聖堂参事会と都市との、この折衝記録は、公証人 („Henning Kotman vicarius“) の手によった。

- (157) Cf. Lüntzel [93a] 528.

- (158) 身分関係について、参考までに山田欣吾「ヒルデスハイム司教座聖堂参事会の人的構成」山田著 [82] をみると、ほぼ220年前1260年における、参事会員29名の身分は、高級貴族および貴族 (14名)・ミニステリアーレン (11名)・市民 (2名)・不明 (2名) であった。なお、参事会員中10名を除いた者がヒルデスハイム司教区以外の出自にあったところから、司教は「ドームカピテルの意志による拘束を強く受けていた」とされる (221頁)。われわれの通告状 [11] 時代、少なくとも「ビール税」導入にたいする動きから察するに、司教と聖堂参事会との関係は、同様にみてとれる。

- (159) Lüntzel [93a] 471 f. バルトルト司教については Lüntzel [93a] 471-485 に詳しい。

- (159a) Cf. Brühning [132] 231 („die Ziese-oder Bierfehde“).

フェーデ通告状と〈名誉保持告知状〉(3)

- (160) Lüntzel [93a] 472 („Bestätigung an den Papst“, „aufgehäuften Schuldenlast“).
司教は、借財を2年以内に支払う保証として9人の従者と馬匹9頭と共にブラウンシュヴァイク市の宿屋に泊まるというインラーガー（人質保証）を義務づけられたほど。
- (160a) UH Bd. 8 Nr. 25.
- (161) UH Bd. 8 Nr. 30. cf. Lüntzel [93a] 473-475（ただ、ここでは、ハノーファー市宛の書簡となっている）。
- (162) UH Bd. 8 Nr. 47.
- (163) UH Bd. 8 Nr. 125. cf. Bode, W. J. L., Geschichte des Bundes der Sachsenstädte bis zum Ende des Mittelalters, in: Forschungen zur deutschen Geschichte Bd. 2, 1862, 254; Schubert [80] 849 (Anm. 725).
- (164) UH Bd. 8 Nr. 113 p. 124-126.
- (165) 司教のミニステリアーレンの一人として Neitzert [79] 8 (Anm. 31) („Hermann vom Hus“)を参照。なお1406年時代の、司教の騎士について、Patze [75] 282 („Zwei Ritter des Bischofs v. H. raubten 《ohne vorhergehende Ehrverwahrung》 …“).
- (166) 〈煉瓦製造場〉の焼打ちは、「備忘録」によると、1485年1月28日と2月3日の2回におよんだ。第1回では、その責めを問われ (mede betegen) たのは、ハインリヒ・フォン・サルダーとその仲間 („mit siner selscup“)であり、仲間の名はシュタインベルクのハンスおよびボルケルトであった (UH Bd. 8 Nr. 113 p. 124 [Anm. 3])。ここに、シュタインベルク一族の名が出現する。第2回の焼打ちに関しては、或る容疑者が捕らえられた。彼は焼打ち当時〈下役の役宅に („in de boddellie“)に住まいをもっており、司教側の〈スパイ (kunsclupper)〉とみなされていた (UH Bd. 8 Nr. 113 p. 124 [Anm. 6])。
- (167) UH Bd. 8 Nr. 113, p. 124 (Anm. 7): 〈dat de rad se mostebefreden laten mit armborsten, deneren, soldeneren unde bussen. 〉
- (168) UH Bd. 8 Nr. 113, p. 124 (Anm. 8).
- (169) Bader, Karl Siegfried, Das mittelalterliche Dorf als Friedens-und Rechtsbereich, Graz/Wien/Köln 1967, 74 ff., 118 ff.

- (170) Schubert [80] 679 (Anm. 158).
- (171) 参考までに「被害記載帳」の一例に Urkundenbuch des Hochstifts Hildesheim und seiner Bischöfe, bearb. v. Hoogeweg, H., 5, Hannover/Leipzig 1907, Nr. 1271 (1368), 1272 (1368); Sudendorf [73] Bd. 10 (1880), Nr. 120 (1406); Codex diplomaticus Brandenburgensis, hg. Riedel, Adolph Friedrich, Haupttheil II Bd. 3, Berlin 1846, Nr. 1374 (1420), 1375 (1420); Voit, Gustav, Zwei Schadenlisten aus dem baierischen Erbfolgekrieg 1540/1505, in: Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg 65, 1978, 172-211, insb. 183-200.
- (172) Patze [75] 280 („Beilagen zu Schiedsgerichtsakten“).
- (173) Cf. Fehr, Hans, Das Waffenrecht der Bauern im Mittelalter, in: ZRG G. A. 35, 1914, 193 („Besondere fehdewürdige Sachen gab es nicht“).
- (174) この意味で、後代の帝国平和令、ラント平和令に影響をおよぼしたマインツ帝国平和令における、フェーデによって権利を主張する前に裁判にうったえる („prius querelam suam coram suo iudice propositam“) べし (Weinrich [35] Nr. 119 p. 468 (5). cf. Fehr [173] 193 [„ern chlag ez alrerst sinem rihter und folge siner chlage ze ende“]) との要請も意義をもつであろう。